日野資矩の晩年の信仰　―祐天寺蔵阿弥陀経箱について―

祐天寺研究員　浅　野　祥　子

日野資矩は江戸時代後期の堂上派歌人である。いわゆる大愚歌合に参加して、勅点を差し止められ、長年赦されなかった。その晩年、篤く仏教に帰依した生活の一面を物語る史料が存在する。

浄土宗祐天寺蔵の阿弥陀経箱の箱書きを紹介し、日野資矩の晩年の生活の一端をかいま見るよすがとしたい。

一、日野資矩の生涯

日野資矩は宝暦六年(1756)八月二十二日、生まれた。父、日野資枝は烏丸光栄の子息であり、日野資時の養子となった人物である。冷泉為村らに和歌を学び、歌人として著名であった。著作に『詠歌一体抄』『日野資枝詠草』などがある。

資矩は安永七年（1778）参議、従三位。寛政十一年（1799）権大納言。文政三年（1820）従一位。文政十年（1827）出家を遂げた。文政十三年（1830）七月九日（一説に二十九日）七十五歳で寂。法号は大巌院瑞誉心順祐寂。著作に『日野資矩詠草』『日野資矩集』などがある。

二、大愚歌合

享和二年（1802）冬、京都で、大愚歌合と呼ばれる歌合が開かれた。この歌合の概要については、盛田帝子氏[1]のまとめを引用させていただく。

堂上家広幡大納言前秀が堂上歌人と地下歌人から、それぞれ月・雪・花の三題で歌を集め、地下歌人大愚慈延に判をさせた三十番歌合である。堂上旧派の冷泉為康や飛鳥井雅威はこの歌合を取り立てて問題視し、堂上家は全員が厳しい処分を受ける結果となった。

『織錦舎随筆』[2]中の「堂上人勅勘」に、この歌合に関する文章がある。大愚歌合の結果の処罰の部分であるが、資韙は受けていた光格天皇の勅点[3]を差し止められ、和歌の師である閑院宮美仁親王から破門された。そのほか処分を受けた人数は二十人近くに及び、師家の破門を受けるなどされた。

歌合に参加して、同じく師家の破門を受けた者の中には、資矩の子が2人含まれる。日野資愛（資矩三男）、大宮良季（資矩四男）らである。

丸山季夫氏[4]は、日野資矩は、息女の婿が歌合開催者の広幡家だったため、参加したのだろうかと「小野勝義より千蔭への書状」（『織錦舎随筆』所収）にあることをあげて述べられる。盛田氏も、『日野家一門備忘草』の内容をあげて、同じ事を述べられる。

大愚歌合が問題となった原因としては、禁中に無礼の人間（広幡卿次男）が混じっていたということと、冷泉家は常から気難しいのだが、門人生島何守（生島備後守大蔵少輔・丸山氏注）に歌合不参加を命じたところ、生島氏が「左様之六ケ敷事ニ候ハヾ御破門可被下」と強く言ったので、冷泉家が立腹したという事情があるということである。

三、隠遁後の生活

資矩の父、資枝は、和歌の宗匠であり、和歌の書も多く残している。当時、宗匠になるには、伝授保持者から伝授を受ける必要があったが、資矩は勅点を止められたことにより、その道を断たれてしまった。『歌道再入門ノ儀ニ付キ難波備前守宛日野資矩嘆願書』（宮内庁書陵部蔵[5]。に翻刻が載る）で資矩は、文政四年（1821）九月十日、六十六歳の時に、一条家の諸大夫であった難波備前守愛敬に書簡で難波を通じて一条兼良に再入門を願っている。

何卒再入干宗匠家之門和歌詠出相叶候身分と相成終身候得者、誠に生前之面目、対先祖孝も相立、誠以難有存候

切々とした文章から、必死の思いが伝わってくる。盛田氏はこの文章について、先祖への孝行とともに、息子資愛が和歌宗匠になる道を開きたかったのだと分析されている。

資短の希望は3年後に叶えられた。[6]以前の如く勅点を賜り、宮廷歌会にも加わることができた。

その一方で、晩年の資短が本心から拠り所としていたものがあった。それは、仏道であった。

四、祐天寺蔵阿弥陀経箱

浄土宗祐天寺に一つの桐箱が伝わる。伝わった年代など、由来は不明である。

箱表面に「佛説阿彌陀経　七部」と書かれる。この箱の蓋の中側に、阿弥陀経書写の由来が書かれている。法量は次の通りである。

縦・・・三〇六㎜
横・・・一二〇㎜
高さ・・・一〇〇㎜　（蓋を閉じた状態）

箱の写真及び箱書きの本文と訓読文を掲げる。

（写真2枚　a・b）

日野正二位大納言資短郷帰依予師累年聴聞淨土眞宗之
極談領納本願念佛之幽蹟矣然後依懇求
之功受得剃度之作法又相承佛祖密傳定師資之約誓日課
三万称旦夕勤修于今不断絶文
化乙亥之冬師卧病大漸期近乃詣本尊前頭願聖迎別時念
佛安祥而化矣寔文化十
二年乙亥十一月十七日矣於茲資短郷慟絶異他及行葬儀
以雜掌某列遺弟席捻香
于棺前丁毎七日之朝嚴具香華供物書寫護念經供于靈前
者都七冊因納之一函
附屬法孫可令丁亡師祥忌日讀誦之云爾

維時　　知恩寺五十四山主
文化十三丙子春正月　順譽祐水大和尚
遺第香堂謹誌

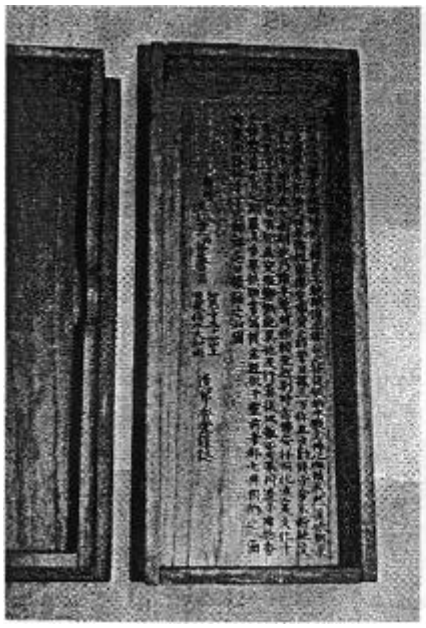
日野正二位大納言資矩卿は予が師に帰依すること累年たり。浄土眞宗の極談を聴聞し、本願念佛の幽蹟を領納す。然る後、懇ろに求むるの功に依りて剃度の作法を受得し、又佛祖密傳を相承す。師資の約誓日課三万を定め、旦夕に勤修して今に断絶せず。文化乙亥の冬、師病に卧し、大漸の近きを期す。乃ち本尊の前に詣で、聖迎を祈願し、別時念佛のうち安祥として化す。是文化十二年乙亥十一月十七日。茲に資矩卿慟絶すること他に異れり。葬儀を行ふに及び、某雑掌を以て、遺弟の席に列し、棺前に捻香す。七日の朝ごとに香華供物を厳具し、護念経を書写す。霊前に供ふるは都て七冊。因りて之を一函に納め、

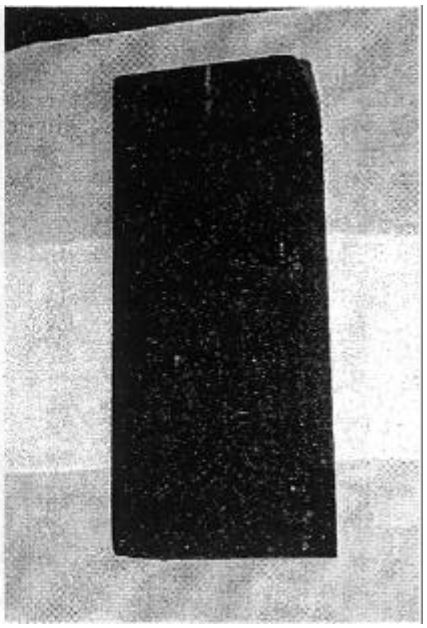
法孫に附属す。亡師の祥忌日に之を読誦せしむべしと云爾。

時に　　知恩寺五十四山主

文化十三丙子春正月　順誉祐水大和尚

遺第香堂謹みて記す





資矩が心底から仏道を信仰し、また仏教の師、祐水上人に帰依していたことがよくわかる。日課念仏三万遍というのは、たいへんな作業である。「剃度」というのは、出家ではなく、法体するというものだったようである。資矩はのちに文政十年（1827）になって本当に出家している。

祐水上人に対しての帰依も深いもので、上人遷化の折の悲しみも深く、「他に異れり」と形容されている。「他に異れり」という表現は、おそらくその折の資矩の行動をもさして表現している言葉と思われるが、資矩は雑掌（葬儀の雑用を勤める）の仕事を得て弟子の席に座り、棺前に額づいたのである。百万遍知恩寺五四世には僧侶のお弟子も多く、おそらく、法体しているだけの一般の弟子に、棺の前に進むことはゆるされなかったのではないか。それで、雑掌の仕事を勤めてでも、師の棺に焼香したいという、この行動は、資矩の衷心からの信仰の表れであろう。

また、そのあとの行為も、並々でないものである。七日ごとに香華を手向け、護念経（阿弥陀経をさす）を書写した。全部で七冊になった護念経を一つの箱に取り納めた、それがこの箱なのである。香堂に託したのは、香堂が祐水上人の高弟であり、また香堂が個人的に資矩の信仰、行動を認めていたからであろう。又もう一つ、六でもふれるが香堂は、『祐天寺寺録撮要』一巻に載る法系図の解説に、「本名天暁暁雲」と記されており、何か文芸活動をしていた可能性を感じさせる。高名な和歌の家柄であるが、現在は不遇で仏道に精進している資矩に対しては、労る気持ちを持っていたのではないだろうか。

五、祐水上人について

祐水上人は『浄土宗大事典』には、次のように記される。

―一八一五（文化一二）。百万遍知恩寺五四世。円蓮社順誉。信濃（長野県）高梨の人。俗姓は中島氏。目黒祐天寺祐海について出家し、増上寺に学び学頭職に補せられる。一七八四年（天明四）七月選ばれて深川霊巌寺（二

○世または一九世）に住し、一七九三年（寛政四）台命により百万遍に入山した。在職中に大方丈・書院・御影堂の渡り廊下、その他の諸堂を改築新築し、

一八一一年（文化八）には法然上人六〇〇回忌を修した。また宗侶の規式の乱れたのを憂い幡随院末寺の非礼を壇林会議に訴える。一八一三年（文化一〇）五月、山内瑞林院に隠棲。（11・17寂）

祐天寺過去帳である『本堂過去霊名簿』でもわかることは右以上にはそう多くない。

法号・・・・・圓蓮社順譽上人不著心阿祐水大和尚

出家の様子・・「起立隠遁善光寺参詣之夜於仏前授名剃度」・・・祐天寺起立（祐天寺二世）祐海上人が隠遁して後善光寺に参詣した折、夜、仏前で剃髪得度した。

遷化・・・・・文化十二年十一月十七日

実父の名・・・信州高梨中嶋治郎助（なお、実母が中嶋性悟妻として載ることを考えると、実父は性悟という法号も持っていた可能性がある）

祐天寺の墓地では、僧侶合祀塔に法号がみられる。

祐天寺に位牌が残るが、香堂とともに一つの位牌に法号が刻まれている。

（写真c）

六、香堂上人について

『祐天寺寺録撮要』一巻法系図の項には、香堂について次のような注記がある。

本名　天暁暁雲。縁山幹事職。後鴻巣勝願寺住。文政六、四、七寂

また、『本堂過去霊名簿』には法号は以下のように記される。

晨蓮社朝譽上人祐阿香堂大和尚

勝願寺三十四主を勤めたと記され、示寂の日は『寺録撮要』と一致する。また、「分骨」とあり、勝願寺から分骨されたことがわかる。

出家の様子・・洛西石見法泉寺住光蓮社圓譽覚成義天和尚のもと、剃髪した。兄弟弟子には、知恩院住職となった順良上人が居る。

遷化・・・・・文政六年（1823）四月七日

実父の名・・・香堂実父母の法号も『過去霊名簿』に納められており、それによると江州住の、釋諦善信士と釋妙諦信女である。また、文政七年寂の北川宇八が香堂兄ということで、法号釋諦信信士が納められる。

なお、勝願寺には香堂上人の墓石が現存するが、資料等は火災の折に焼失し、残っていないそうである。祐天寺の墓地では、祐水と同じ合祀塔に法号がみられる。

阿弥陀経箱は、日野資矩が書写した経典を入れて、祐水霊前に供えられた。祐水の弟子香堂は、祐水の祥月命日には経典を読誦することを、弟子たちに伝えるべく、経典と箱の由来を箱に記したのである。

祐水、香堂ともに祐天寺に由縁の深い僧侶である。その縁で箱が祐天寺に納められたものと考えられる。なお、現在祐天寺墓地に、日野氏の墓所がある。これは明治以降に構えられたもののようであり、箱とは関係がないと思われるが、奇遇を思わせるものである。

（祐天寺研究員）

（1）「日野資矩と大愚歌合」『鈴屋学会報』16号（鈴屋学会、平成11年12月）

（2）『日本随筆大成』第1期5巻

（3）資矩は寛政8年（1796）8月18日に、光格天皇の勅点を許可されている。「近世後期堂上歌人の修練と挫折―日野資矩の場合―」（盛田帝子、『雅俗』7号、九州大学文学部雅俗の会、平成12年1月）

（4）「雑筆　冷泉家・大愚歌合」（『国学史上の人々』昭和54年7月。初出は『洛味』276集。昭和50年9月）

（5）「近世後期堂上歌人の習練と挫折―日野資矩の場合―」（（3）に同じ）

（6）（5）に指摘がある。『鷹司政通日記』六の文政七年の項に載る。